

師道に関する歴史的研究
—雑誌『師道』を中心として—

専攻名：学校教育専攻

コース名：教育コミュニケーションコース

学籍番号：M08016C

氏名：松村 千鶴

1. 問題の所在

改正教育基本法(2006)では、教員は、使命感と職務遂行力が求められている。梶田(2007)が指摘するように、近年、一部とはいえ職務遂行力に欠ける指導力不足教師、これに加えて使命感にも欠ける不適格教師が存在することによる教師バッシングが起こっている。

このような教員の質をめぐる課題に対しては、近年、世界的な動きとして、「教員養成スタンダード」策定の必要性が示され、教員の質保証に関する様々な取り組みが進んでいる。しかしここで注目したいのは、日本の教師に求められる資質能力には、数量化できない「人間性」を有していると捉えられている点である。

2. 先行研究と研究の目的

先行研究から明らかになったことは、第1に、日本の教師に求められる資質能力に「人間性」を含むという特質は、日本や中国など東アジア特有のものであるということである。しかもその人間性には幅広い見識という科学的な資質のみならず、「使命感」や「熱意」などの精神的要素を含んでいる。そのため、日本の教職の専門性は未分化で教職の「無境界性」「無限定性」につながっているという指摘がある。梶田も「師道再興」という言葉で、教育者としてあるべき姿を見直さなければならぬと述べている。第2に、「人間性」を含む教師像の背景には、近代以前の伝統的な教師像がある。皇(1975)は藩校や寺子屋の師匠、芸能の師匠はいずれも道徳的な実践性を持っていたと述べている。第3に、近代以降、学校教育制度及び師範学校や大学における教員養成制度は、欧米の制

度を参考にしているにも拘わらず、その複雑さにおいて日本独自の特徴をもち、常に質の高い教員確保を課題として改革され続けてきたということである。これらの先行研究から、日本の教員の資質能力に「人間性」を含む特質は東アジア特有のものであり、近代以前の伝統的な教師像にその背景があることがわかった。この「人間性」の具体の姿は客観的に捉えにくく、人格的に優れた教師を制度によって目的的に養成しうるのかと言う根本的な問いも生まれる。

そこで教師の「人間性」について研究する上で、手がかりにしたいのが「師道」という言葉である。大辞泉によると、「師道」とは「人の師として守り行うべき道」であり、教師の道徳性やモラルを含意している言葉である。この「師道」を書名に含む書物が昭和前期に刊行され、教育雑誌『師道』が創刊されているが、先行研究は確認できない。本研究では、この雑誌『師道』に着目して当時の師道論を分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法と論文構成

研究の方法は、「師道」に着目して文献を収集し、雑誌『師道』を中心に分析を行う。論文構成は下記のとおりである。

序章 研究の目的と方法

第1章 師道の歴史的概観

第1節 教師像の歴史的概観

第2節 明治の雑誌にみる師道論

第3節 昭和以降の書物・雑誌にみる師道論

第4節 昭和前期の特徴的な師道論

第2章 雑誌『師道』の分析

第1節 『師道』の刊行とその背景

第2節 『師道』の構成とその特徴

第3節 『師道』における内容の変遷

第3章 雑誌『師道』における師道論の展開

第1節 教育論や師道論のキーワード分析

第2節 師道論

終章 研究の成果と課題

4. 研究の概要

第1章では、日本の古代から現代の教師像を歴史的に概観したあとに、「師道」に係る書物や雑誌の歴史の変遷をたどり、特徴的な師道論について考察した。第2章では、昭和前期に刊行された雑誌『師道』の分析を通して、構成の特徴や背景を明らかにした。第3章では『師道』で展開された教育論や師道論の特徴を明らかにした。

明治中期以降には、国の訓令や教育雑誌に「師道」の語が頻繁に登場するようになった。

そして昭和前期の戦時体制下に入ると、国の教育施策に「師道」の昂揚が挙げられ、あわせて「師道」を書名に含む書物や教育雑誌が現れた。これらは、昭和の戦前・戦時中に集中して刊行されている。これらの師道論は、理想的な「師」のモデルとして「先哲」や「恩師」をあげている。その先哲の多くは、「江戸時代の儒者」それも私塾の師匠が多い。昭和前期においては「師」に模範や尊敬の意味があり、「師と弟子」の関係を内包しており、中国古典にその起源を見ることができる。

雑誌『師道』は、日本師道研究会によって1936年(昭和11年)4月に創刊され、1938年(昭和13年)12月まで残存する。研究会は、日本のペスタロッチと言われた教育学者小西重直を筆頭顧問とし、1834年(昭和9年)の天皇が出した「教育精神作興に関する勅語」を受け、師道の本質を明らかにするとともに、教育精神を奮い立たせることを目的として発足した。会員の多くは小学校教員である。

雑誌『師道』は、短期間に内容構成が大きく変化する。第1期である1936年(昭和11年)度創刊当初は、総合雑誌の体をなし、「教育精神の作興」

という目標を高く掲げ、教育精神を読み解く教育哲学や師弟愛美談などを強調した内容になっている。第2期である1937年(昭和12年)度前半は、時局に関する記事が出現する一方で、国家主義教育の偏重が国粹主義にならないように国家間の調整が必要であるという論考などもあり、教育雑誌としての矜持を保とうとした編集姿勢がうかがえる。第3期の1937年(昭和12年)度後半は、「国民精神総動員運動」を振興する戦時体制下、総理大臣や軍人などの執筆が目立ち、それまでの多彩な切り口の師道論や教育論は姿を消す。第4期の1938年(昭和13年)度になると、時局分析が増え、頁数も減り、師道の論考のみになる。

『師道』の特徴について3点述べる。まず1つ目として、『師道』では、江戸の儒者や武士道、中国古典、西洋哲学など多様な思想に依拠した師道論を展開していた。『師道』が多様な視点で師道を語ったことにより、当時の教育界に新しい教師観を示したと考えられる。2つ目として、これらの多様な師道論は、戦時体制が進むにつれて、挙国一致体制につながるものへと急速に変容していく。それは①日本精神や教育者精神が、皇道精神と武士道精神によって語られるようになること、②取り上げる人物が山鹿素行や吉田松陰、西郷隆盛、乃木將軍などが多くなること、③葉隠、水戸学などの武士道と師道に関連付けること、などに現れている。時局の記事が増加することとあわせて、教員に戦時の心構えをもたせようとした国家の企図が読み取れる。3つ目として、『師道』の師道論は、東洋思想によるものが多く、江戸の儒者と中国古典を合わせて4割を占めていた。書物同様、江戸の儒者たちは師道のモデルとして捉えられていた。今後は、師道に関する著書などをもとに、師道論の質的な分析に取り組んでいきたい。

主任指導教員 渡邊 隆信

指導教員 渡邊 隆信